

ヨーロッパの主権国家

今回学ぶこと

西ヨーロッパでは、16世紀ごろから、それまでの封建制下の分権状態にかわって、主権者の下に統合される集権的な「国」が形成され始めた。国の成り立ち、範囲、構造、主権者（特定個人とはかぎらない）のありかたは、国によってさまざまである。今回は、16世紀に強大な勢力をもったスペイン、小国としての自立性を保とうとしたイギリス、スペインから独立して17世紀に経済大国となったオランダを取り上げる。

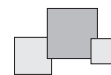
調べておこう・覚えておこう

- フェリペ2世の時代のスペインの領土とスペイン王の支配地域を、地図で確認しておこう。
- エリザベス1世が即位する前の歴代のテューダー朝イギリス国王を調べ、それぞれの治世にどのような事が起きていたかを年表に整理しておこう。
- オランダの独立戦争の経緯を調べてみよう。

フェリペ2世のスペイン

16世紀のスペインは、アメリカに広大な植民地をもち、植民地から送られる銀を手に入れることができた。スペイン本国以外にも、イタリアの南部やネーデルラントなどヨーロッパ各地に領土をもち、フェリペ2世の時代には、当時のヨーロッパ最強の勢力を誇った。植民地を含むスペイン領全体を「スペイン帝国」とよぶ。

この帝国を構成した地域・植民地を、ゆるやかに統合しようとしたところに、スペイン帝国の特徴がある。一方、スペイン本国（アラゴン・カスティーリャ連合王国）自体は、他民族多文化国家であり、集権的な体制が十分機能したとはいえない。



エリザベス 1 世のイギリス

イギリス（イングランド）は、14～15世紀の戦乱の時代を経て、16世紀にはテューダー朝の国王の下で、集権的な国造りを進めた。

なかでもヘンリ 8 世の時代には、イギリス国教会が成立して、君主と教会が一体となって国民統合を進めることができた。テューダー朝最後の君主となったエリザベス 1 世は、16世紀後半から 17 世紀初頭まで、45 年間女王の座にあり、この間にイギリスは国としての自立性を確実なものにした。

経済大国オランダの登場

スペイン領であったネーデルラントは独立戦争のすえ、北部 7 州がオランダ（正式にはネーデルラント連邦共和国）として 1648 年に正式に独立する。この独立戦争の後半から独立後の数十年間、つまり 17 世紀のオランダは、黄金時代ともよばれ、ヨーロッパ全域にわたる商業活動と、東インド会社によるアジア貿易、さらに国内産業の繁栄によって、ゆるぎない経済力をもつことができた。商人と都市の経済が中心となったオランダは、商人たちを担い手とする独自の都市型文化を開花させた。レンブラントの群像画はその代表である。

